

「ハーバード道教研究シンポジウム」参加報告記

酒 井 規 史

二〇二四年の四月二十五日から二十六日にかけて、

Harvard Daoist Studies Symposium: The Body, Gender, and Self-cultivation in Daoism (ハーバード道教研究シンポジウム・道教における身体・ジェンダー・修養) が開催された。四つのパネルが組まれ、合計九名が研究発表を行った。以下はその参加報告記である。

今回のシンポジウムはそのタイトルから分かるとおり、ハーバード大學が会場であった。ハーバード大學宗教研究機構、イェンチン研究所、ハーバード大學アジアセンターが共催し、Joseph Shubow 記念基金からも支援を受

けたものである。⁽¹⁾

シンポジウムでは三つのテーマ (Body, Gender, Self-cultivation) が設定されていた。趣旨文によれば、この三つのテーマは道教研究においてもっとも実りのある成果が期待できるものとして設定されたという。第一に、道教における「修養 (Self-cultivation)」は、常に「身体 (Body)」と切り離せないのが特色であること。第二に、道教は各時代や流派によって「ジェンダー (Gender)」に對する態度が多様であり、道教以外の領域とも差異があることが理由である。現在のアメリカの人文學におけ

る興味関心があらわれているテーマともいえよう。全ての報告がこの三つのテーマを前面に打ち出していたわけではないが、各報告者は何かしらの関連性を持たせ、議論のきっかけになるように心がけていた。

それでは、シンポジウムの概要をパネルごとに見ていくことにしよう。タイトルは基本的に英語であるが、発表者による日本語譯と中國語譯があった場合はそれも並記している。なお、二十五日の司會はJames Robson氏、二十六日はMichael Puett氏（マイケル・プエット Harvard University）が擔當した。

● 四月二十五日

〈Panel 1 : Medicines, Meridians, and Meditation〉

・ Michael Stanley-Baker (Nanyang Technological University)

“The Medicalization of Chinese Religion: The Han Watershed, the Rise of Religions of Personal Salvation, and how Embodied Practices Came to

Figure Spiritual Status in Chinese Religions”

・ 加藤千恵（立教大學）

“A study on the connection between the Ren Du meridian (Conception Vessel and Governor Vessel) and Internal alchemy”（任脈督脈と内丹との結合についての一考察）

最初のパネルでは、醫學・藥學と道教の関連を検討する報告がふたつ行われた。

Stanley-Baker氏は、醫療と宗教の關係が後漢時代を機に決定的に變化していくことを述べた。前漢においては醫術と宗教的な方術とは別のカテゴリーとされていたところが、後漢時代末期において戰亂・人口流失・飢饉・疫病の蔓延といった事態が発生するにおよび、人々は「命」の危機を感じるようになる。その際に出現した太平道や五斗米道は、道德的な振る舞いと運命・疾病を結び附けて、個人の苦しみを救済する方法を傳授することで勢力を擴大していった。ここにおいて、醫療の領域

に宗教が入り込むことが決定的となり、宗教醫術的な市場 (the religio-medical marketplace) が確立し、續く六朝時代にも繼承されていったという。

加藤氏は、内丹における通説の再検討を行った。現在、内丹における主要な氣の周流經路が醫術における任脈・督脈に相當すると一般的に認められている。しかし、その二脈はもともと一對であったわけではなく、北宋時代に現在の經路が定まったという。また、宋末元初の俞琰が任脈・督脈によって内丹における氣の周流を説明したあとも、内丹の實踐者たちが醫家の説を簡単に受容しなかったことを明らかにした。

〈Panel 2 : Daoism and Buddhism〉

・ Stephen R. Bokenkamp (Arizona State University)

“Buddhism in the Declarations of the Perfected”

(《眞誥》中の剪輯痕跡)

・ Gil Raz (Dartmouth College)

“Traces of the Way: Memory and Transformation

in Daoist Jataka tales”

二番目のパネルでは、六朝時代の資料をもとに道教と佛教の交渉について検討が行われた。

Bokenkamp氏は、『眞誥』にみえる佛教思想の痕跡と、道教信者の佛教への反應をあつかった。神仙のお告げを受ける靈媒であった楊羲と同時代人たちが、外來の思想である輪廻を重大な問題ととらえていたこと、その一方で『眞誥』に残されるお告げは佛教思想の痕跡を残さないように編纂されていることを明らかにした。また、このことは中國において佛教がいかに受容され、中國化した佛教が形成されていったのかを考える際にも示唆的であると指摘する。

Raz氏は靈寶經のひとつ『洞玄本行妙經』を足がかりにして、道教と佛教の違いを考察する。この經典は道教の神の前世について述べており、佛典の今生譚にインスパイアされたものである。しかし、佛教では前世で悟りを得たかどうかの問題となるが、道教では身體の變容を

經で、神としてのポジションを得ることがより重視されている。また、前世で傳授された「靈寶真文」の效用が神となる契機となっており、道教の世界觀にあわせた改變を行っているのが特色であるという。

また、『洞玄本行妙經』では、それらの前世譚（靈寶真文）による救済）は道を體得した者の「跡」であり、「靈寶真文」がくり返し世に出現するのはその「跡」を再現するからだと説明していることに注目する。そこから、この經典以外にも道教では「本」（本源的なもの）の残した「跡」をトレースすることが重視されると指摘する。また、この「本」と「跡」の関係性は、天書とそれを人が書き記したものの、道教の神とその姿をうつした造像石などにも當てはめられるという。

〈Panel 3 : The Body and Gender: Internal Alchemy and Female Alchemy〉

- ・ Dominic Steavu (University of California, Santa Barbara)
- “What Do Divine Embryos and Mushrooms Have

in Common? Some Reflections on the Virtues of Self-Reproduction in Daoism”

- ・ Elena Valussi (Loyola University Chicago)

“Resistant fleshiness: Gender, body, and transcendence in Daoist self-cultivation”

- ・ Sasha Makarova (Harvard University)

“Bodily Formation and Female Impurity: Placenta as the Source of Mortality in Shangqing Texts”

三番目のパネルでは、道教における肉體や身體觀、ジェンダーを検討するものであった。今回のシンポジウムの主要テーマを二つあつかうもので、特色がよくあらわれたパネルだったといえよう。

Steavu氏は、内丹の結果産み出される「胎」と靈芝の類似性について検討した。内丹においては、陰と陽など、男女の關係を投影した氣を操作することで、自らの中に金丹を生成する。そして、金丹の比喻としては嬰兒や胎児が用いられる。それは自らの身體の中で無性生殖

を行っているともいえる。また、靈芝も生殖を経ずに（つまり、無性生殖で）純陽の氣から自生するものとみなされており、それが不死の象徴となる要因であったという。無性生殖という切り口から道教の身體觀・世界觀に迫る報告であった。

Valussi氏は、道教におけるジェンダーと身體性の問題について検討した。もともと性差のなかった修養法に女性のためのものが登場したことで、女性の身體はさまざまな修養法が行われる舞臺となり、また同時に女性に適した修養法が探求される場所ともなったという。そして、内丹法（女丹）においては、體內に金丹を生成するために、その妨げとなる月經を止める（いわゆる「斬龍」）ことが要求された。女丹においては、昇仙することは身體だけでなく性別をも超越する行爲であったと位置づける。近年のフェミニズムの議論を踏まえて、女性の修養法について大きな見取り圖を示す報告であった。

Makarova氏は、上清經にみえる修行法に焦點を當てた。『洞真太一帝君太丹隱書洞真玄經』によると、胎盤

には十二の「結」（結び目）があり、生後も身體中の十二箇所に存在し續ける。そのため、結び目に氣が滯留して死の遠因となる。そして、體內神がその結び目を解くのを存思すれば、昇仙することができるという。この修行法の由來については、漢代以降、女性の月經（による出血）を穢れとみなす觀念が生じ、それが胎盤に死を招く結び目ができるという思考法につながっていったと考えられると指摘する。古代中國における身體觀・性・生殖についての概念が組み合わされ、それがこの修行法の思想的基盤を形成したという。

＜Panel 4 : The Daoist Master Between This World and the Other World＞

・ David J. Mozina (Harvard University)

“Transcorporeal Bodies and the thonic Realm of Fengdu

・ 酒井規史（慶應義塾大學）

“The Chaoxiu Mizhi 朝修祕旨 in the Collection of

最後のパネルでは、儀禮をテーマにする報告が行われた。とりわけ、儀禮を行う法師や道士がどのように異世界と關わり合うのが検討された。

Mozina氏は、十二世紀から十三世紀ごろ四川に登場したと思われる酆都法をテーマに報告を行った。この儀禮は死者の世界である酆都にいる魔王や神將たちの力を借りるものであり、独自の「黒律」（現實社會の法律を模した冥界の法律）でもって酆都法を使う法師と冥界・鬼神との關係性を規定している。考召という道術では、災厄を引き起こす惡鬼を子供の靈媒に取りつかせて、「黒律」にもとづいて取り調べと裁判が行われる。その際、儀禮を行う法師と靈媒の身體が、生者の世界と冥界をつなぐ媒介物となっているという。道法の儀禮における世界觀や身體觀の一端を明らかにしたものである。

筆者（酒井）は、ハーバード大學イェンチン圖書館が所藏する『朝修祕旨』という寫本について發表を行った。

この寫本は康熙二十八年（一六八九）に龔道言という道士が湖南で作成したものであり、靈寶法に見える各種の儀禮のプログラムについて、龔の師をはじめ、同じ法脈に屬する道士たちのコメントや口訣が記されている。それらのコメントから、儀禮を行う際に同時に行われる瞑想法や、そこに見える彼らの世界觀を明らかにした。また、ある法脈の教えがどのように道士たちに繼承されていたのかを明らかにした。

〈Roundtable : New Directions in Daoist Studies〉

最後に、發表者全員と司會をつとめたRobson氏とPuette氏も參加して、總合討論が行われた。シンポジウム全體の總括が行われるとともに、アメリカ（および主催のハーバード大學）における今後の道教研究はどうあるべきか議論された。國際的な研究者のネットワークを活用したセミナーや集中講義の実施、オンラインイベントの開催、文献を読む研究會の組織など、道教研究を

活性化するためのアイデアが登壇者と会場から提起された。

また、兩日とも研究発表のあとに、道士を招いて道教の實踐面のデモンストレーションが行われた。初日は臺灣の道士二名が招かれ、それぞれ受録や符の書き方についての解説と太極拳の實演を行った。また、二日目は大陸から招かれた五名の道士が、世界宗教センター (Center for the Study of World Religions) の中庭で三清の神々に幸福を祈る儀禮 (三清朝科) を行った。ハーバード大學で行われた史上初の道教儀禮ということである。

今回のシンポジウムに登壇した研究者の数は十名にも満たないが、ベテランと中堅を中心に男性と女性の研究者もバランスよく配置されていた。また、研究対象となる時代は漢代から清代まで、内容では教理と實踐における様々な側面をカバーしていたといえよう。

なお、本稿を記している時点で、アメリカの道教研究は存続の危機に瀕している。というのも、道教の研究者はほぼ全員、大學の教養教育を擔當する部門に所屬して

おり、後進の研究者を育成することができないのが要因である (その點、日本と状況が似ているところもある)。本シンポジウムの参加者の中では、Bokenkamp 氏のみが大學院生を指導しているが、間もなく定年退職を迎える。それゆえ、アメリカの代表的な研究機關であるハーバード大學で本シンポジウムが開催され、道教研究というジャンル自體に光が当たったことには大きな意義があるといえよう。今回の催しがアメリカにおける道教研究を活性化させるきっかけになることを祈りつつ、本稿をしめくくりにしたい。

註

(1) 今回、筆者を招聘して下さった Robson 氏、Puetz 氏、Makarova 氏にこの場を借りてお禮申し上げる。